東京女子医科大学看護学会第 11 回学術集会 シンポジウム 「2025 年問題に向けた私たちの挑戦」

総合的な在宅支援「ふくしあ」の活動から

岡田 美穂(掛川市西部地域健康医療支援センター)

掛川市では、"希望が見えるまち"誰もが住みたくなるまち"を目指して、「教育・文化」「健康・子育て」「環境」の3つの日本一のまちづくりを推進している。その中で、H 25.5 急性期医療を担う「中東遠総合医療センター」開院に伴う退院後の支援体制づくりの必要性から、H 22 年度より、地域健康医療支援センター「ふくしあ」を市内5か所に設置し、「掛川版地域包括ケア」を展開している。住み慣れた地域で安心して在宅生活を送れるよう、医療・保健・介護など生活面にわたる総合相談や各種制度の運用、全体のコーディネイトを行う「行政」、高齢者の総合支援を行う「地域包括支援センター」、地域の育成や見守りネットワークの構築を行う「社会福祉協議会」、在宅医療を支える「訪問看護ステーション」の官民4団体が同じフロアーで活動している。

最近の健康問題は、生活習慣病をはじめ、介護・孤独死・虐待・うつ病・自殺・貧困など多岐にわたり、複雑で、困難化している。そのため、迅速な対応や多様な支援内容の提供が求められている。「ふくしあ」設置前の単独機関では対応困難だった事例が、多機関による地域ケア会議などで情報共有や役割分担をすることで総合支援が可能になってきました。さらに健康・医療・障害・経済などの複合的な問題への解決に繋がった事例やケースが重症化する前に対応できた事例など多職種が連携して総合支援に取り組むことで、個人や家族問題への解決だけでなく、地域力の推進や強化にも結びついている。

「ふくしあ」設置以降、地域住民からは「地域の窓口として、相談しやすくなった」など嬉しい声が寄せられている。また、健康づくりや生活習慣病予防を目標とした「ふくしあ健康相談」、「ふくしあ健康講座」など地域に巡回しての予防活動を保健師が中心となって展開している。最近では子供から高齢者まであらゆる世代に働きかけることで、地域の理解が得られ、地域主体の活動へと広がり、一つ一つの活動が地域包括ケア体制の構築にも繋がっている。

今後も「ふくしあ」の所長として、保健師として、住民の顔が見える地域活動を大切にしていきたい。



































